J.A.D.E

ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者　酒井彰（運営委員会代表）

平成20年3月21日
通巻55号

第12回　日本下水文化研究会　総会のお知らせ

日本下水文化研究会では平成20年度総会（第12回）を下記のとおり開催いたします。平成19年度は地球環境基金の助成金を得て行われてきたバングラデシュでの海外技術協力事業を３つの新たな事業で継続することができました。そのひとつは　４月より実施してきたイオン環境財団の助成による建設したトイレのフィローアップを中心とした事業です。10月からは、ふくりゅう53号でお知らせしましたように、JICA（国際協力機構）草の根無償協力事業と TOTO 水環境基金によるプロジェクトが始まりました。また、JICA、TOTO のプロジェクト実施にあたっては、バングラデシュにおける海外 NGO 登録も行いました。現地の事務所をはじめ、このような体制は整えつつありますが、国内の実行体制は以前と変らないところから、早急な対応が求められています。

関西支部、し尿・下水分科会の活動も活発で、水に関連する NGO とのネットワークづくりなどの成果があがっています。

こうしたなかで、本会の運営状況は、収入面、活動の担い手など懸案の課題は解決を見ないまま推移しておりますので、総会では何らかの打開策をご提案させていただきたいと考えております。ふるって、ご参加いただきますようお願い申し上げます。５月中旬には総会議案書をお送りする予定ですが、やむを得ず参加いただけない会員の皆様は、委任状を提出願います。

プログラムは、第９回以降の総会同様、記念講演は行わず、本総会を分科会、支部の活動成果を会員の皆様へ伝達する場として企画いたします。諸活動についてご理解を深めていただいたうえで、忌憚のないご意見を交換できる場にしたいと思います。

記

日時　平成19年6月14日（土）　13:30 ～ 15:00
場所　日本水道会館７階会議室
　　千代田区九段南４－８－９
プログラム（予定）
　第１部　分科会・支部活動
　第２部　総会（15時頃総会閉会）

※総会終了後懇親会を開催します。

2008年度バルトン記念墓参と講演会のご案内
第1回バルトン賞は下関市上下水道局に

前号でもお知らせしましたが、2008年W・K・バルトン記念墓参及び講演会を下記により実施いたします。

東京都青山霊園のバルトン墓碑に墓参し、バルトンのご子孫であるケビン・メッツ氏の津軽三味線と小林ユカリ氏（東京パイプバンド）のバグパイプによるスコットランド民謡の演奏が捧げられます。午後は会場を日本水道協会に移し、講演とともに新たに創設されました第１回「バルトン賞」の表彰を行います。

ふるってご参加されますようご案内申し上げます。

記

主催：NPO 法人日本下水文化研究会・バルトン記念基金管理委員会

［記念墓参］

日時：2008 年 5 月 10 日(土)　午前 10 時 30 分集合
～ 11 時 10 分

集合場所：青山霊園入り口　島村花店
東京都港区南青山２－３４－３１

最寄駅：地下鉄千代田線乃木坂駅　徒歩 5 分、
銀座線外苑前駅　徒歩 10 分

［表彰式及び記念講演会］

日時：同日　午後 1 時～ 3 時 30 分

場所：（社）日本水道協会会議室
東京都千代田区九段南４丁目８－９

参加費：1000 円（資料代）

最寄駅：JR 市ヶ谷駅　徒歩５分
または、東京メトロ市ヶ谷駅　徒歩５分

表彰式：第１回バルトン賞　下関市上下水道局
感謝状　小林ユカリ様（東京パイプバンド会員）

記念講演：
「下関市におけるバルトンの業績」（仮題）
下関市上下水道局
「シャドーから見た技術文明
～２１世紀の技術者の歩む道～」
稲場紀久雄　大阪経済大学教授

稲場教授の講演は、英国土木学会副会長P. W. Jowitt 教授が2006年「バルトン生誕150年記念事業」として英国エディンバラ市ヘリオット・ワット大学で開催されたバルトン記念セミナーで行った講演「Engineering Civilization from Shadow」及びそのとき配布された資料の紹介を中心に行われます。

会場の地図等は、本会ホームページをご参照願います。http://www.jca.apc.org/jade/index.htm

第41回定例研究会（兼第49回屎尿・下水研究会）報告

『トイレのひみつ』刊行のいろいろ

平成 20 年 1 月 24 日（木）、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターにおいて、第 41 回定例研究会（兼第 49 回屎尿・下水研究会）が行なわれました。講演者は、「トイレのひみつ」の編集製作を担当しシナリオも書かれた大島善徳氏（大悠社）と、漫画の作画を担当されたひろゆうこ氏です。お二人に、この本が出来るまでのアラカルトを話していただきました。

「トイレのひみつ」は、学習研究社の「まんがでよくわかるシリーズ」の一環として刊行された小学生向けの学習教材です。小学校の図書館や公立図書館に贈呈されている非売品です。今回の講演は、本図書の製作にあたって全面的に協力された東陶機器（株）さんに特にお願いして実現したものです。

講演の骨子は以下のとおりです。

① このシリーズは、学習指導要領による「総合的な学習の時間」で活用してもらうことを期待して企画された。

② シナリオが漫画化されているほか、写真や図、コラム記事、豆知識などが散りばめられており、トイレのことがわかりやすく説明されている。大人の我々が読んでも良いくらい内容は豊富である。

③ 次の七つの章からなっている。
トイレがないと困っちゃう／さまざまなトイレとそのしくみ／トイレはどうやってできるの／快適なトイレをめざして／ウォシュレットができるまで／環境にやさしいトイレって／トイレのこれからは

④ この本が出来るまでの流れは、資料収集→登場人物や章立てなどの構成案を作成→取材、調査を行ないシナリオを作成→作画（キャラクター考案、下絵・コマ割り、色の確定、ペン入れ、色つけ、表紙作成）→コラムの作成→セリフの入力、ルビつけ、豆知識作成などの入稿用原稿の作成→校正→印刷・製本であり、この間およそ半年かかっている。

⑤ シナリオから右のような漫画になるという例を一つ紹介する。

シナリオ：２学期が始まって間もないころ。ほかにはだれもいない静かな道。正太が歩いている（後ろ姿）あせりつつ、そろりそろりと歩いている／（ト書き）今井正太、小学校五年生／正太「（自分に言い聞かせるように）もう少しだ…。うっ」／その後ろから、友香が小走りに駆けてくる／（ト書き）白井友香、小学校五年生／友香、正太に気づく。正太の妙な歩き方を不審に思う。友香、正太に近づく／友香「おっ、正太じゃん。どうしたの？」／友香、正太の肩をたたく。正太、びくっとする。

（運営委員　地田修一記）

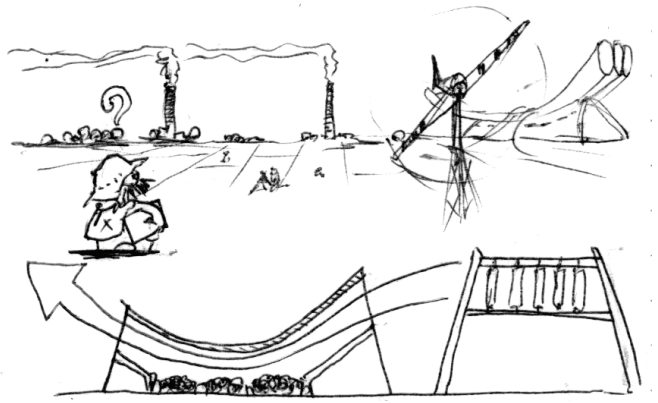
風の国バングラ　トイレ作りの現場から

本会会員　高村　哲

ダッカに着くといつも車酔いのような気分になる。宿についても変わらない。まあ、丸一日飛行機に押し込められたり、じっとベンチで時間待ちをしてきた後だから、けっこう体にはきついが、それより排気ガスじゃあないかという気がする。町の中は車とベビー（３輪タクシー）とリキシャ、そして廃墟さながらのバス、その中にはロンドンの２階建てバスの第一世代の生き残りさえ、ぼろぼろ、がたがたになって走り、バスは日露戦争当時の軍艦のように両弦にバルジを装備し、乗用車も対抗上前後をパイプの盾で守り、クラクションを鳴らし、ぶつかり合い、怒鳴りあいつつあふれかえっていて、警官達もみんなマスクをして防衛しているのだから、そんな中に平和ボケ、自衛本能欠如、マシュマロ化したぽっと出の日本のおとっつあんなんか突然放り出されたらまあ、どうにかならないわけは無い。

それでも私達 JADE が活動している現場に向かうとほっとします。JADE は南東の丘陵地帯の村々、南西の水

田地帯の村々、そして遠く西のインド国境地帯の村々でJADE Bangladeshや協力してくれるNPOと一緒に広く活動を続けています。そんな現場に向かうべく車を走らせると、ダッカの排気ガスの中から見渡す限りの田畑の中に飛び出て、生き返るようです。しかし、揺れる車の中で目的地までの距離や、燃料の種類ごとに異なる燃費を計算し、燃料代を計算し、レンタカーの適切な金額を計算し、途中で橋を渡る通行料を小銭で用意しなどとやっていると、車に弱いとギブアップしそうになりますが、無駄なお金は使えないのは当たり前でサボるわけにも行かない。そんな車内から呆然と外を見るとどこに行っても見えるのはレンガを焼く煙突の群れ、煙突から立ち登る黒い煙。



いつも思うのだが、あの煙突の煙はいつも５ｍもまっすぐ立ちのぼった後、急に南東へ直角に曲がっているのは何でだろう。山も丘も無いこの国のほんの20～30m上になんで目に見えない空気の層があるんだろう不思議だ。そしてそこに安定した空気の力を感じ、その力を利用できないだろうかといつも思っている。移動中浮かんでくるいろいろなプランを、一緒に動いている建築家と話し続ける。今回はずっと、溢れては引いていって、多すぎたり足りなかったりしている雨水をどうやって無駄にしないで利用できるか話し続け、プランをまとめていった。そんなことを話しながら目は、立ちのぼっては直角に曲がってゆく煙を追い続け、「あの風を味方にしたいなー」と思い続けている。そうして頭の中に立ち上がってくるのは「風の塔」。平原のあちこちに立つ「風の塔」が音も無く何の煤煙も出さずに黙って働いている。そんな姿がどんどん頭の中で大きくなってゆく。

もしかしたら今の農村のエコサントイレではなく、都市部をやるときはそれが使えるのかもしれない。都市で今のように各家庭で独立した再生可能な再利用の仕組みを動かすのはつらいだろうけれども、回収して、まとめたら「風の塔」でうまく処理して全体として再生し続ける機能ができないだろうか。そんなことを考えながら車で走り続けている。規模を広げれば良いわけではないと思っていても、いずれ都市部への考えをまとめなくてはいけないのだろうから避けては通れない気もする。

さてそんな妄想をしつつ、走り回り、現場に着くとたくさんの村の人や技術屋さんに取り巻かれる。会えるわずかなチャンスを有効に利用しようとあせってもいる。私達も技術屋としてその場その場のほんの数十分の勝負で、適切な対応をしなければいけない。この間もタイルできれいに出来上がって、私達が来たらオーナーの若夫婦と一緒に完成式典をやろうとお祝い気分で待っていた群衆の中で、建築家は「ダメだよ。壊して作り直さなくちゃあダメだよ。使っちゃあいけないよ」と非情なことを言う。一緒に祝いたいのだが、これからたくさん作り続ける最初の段階で、間違ったものを今ここに作って残しておくわけにはいかないのだ。私達が一緒に作り続けるわけにいかないのだから、少しでも違ったものを残して、それでうまくできたと喜んでいる現地のエンジニア達を残していくわけにはいかないのだ。今のわずかなミスは伝言ゲームのようにどんどん拡大して曲がっていってしまい、しまいには「日本人がこういった」とまるで違うものを作り続けかねない。建築家は「今、ここで自分達で壊して作り直す事が必要なんだ」と言う。そんな真剣勝負を続けながらバングラの男や女達と語り合い。本当は現場で今やらなければいけないことはずいぶんあるが、次はいつかわからない中でできるだけのことをしようと上空の風を感じながら歩き回っています。

バングラデシュで水と衛生について見聞きして

京都大学大学院　修士課程　柴田　翔

2007年8月と9月、そして12月に修士論文の現地調査のため、流通科学大学の酒井彰教授と共にバングラデシュを訪問しました。私の修士論文は研究室の先輩である福島陽介氏の研究を引き継ぎ、バングラデシュ農村部における飲料水の代替技術導入のための適応的計画の考案を目的としています。今回の訪問では酒井先生をはじめとして日本下水文化研究会の高橋邦夫氏、保坂公人氏、高村哲氏、東北大学の坂本麻衣子氏そしてJADEバングラデシュのトファエル・アーメド氏や現地NGOのSPACEのメンバーの協力のもとに、アンケート調査と現地の水汲み行動に関する調査を実施しました。

海外に行くのは高校生以来で、初めてダッカ空港から一歩出た時は、空港の建物を囲む柵とそれを取り囲む人々の多さに圧倒されました。インドでは空港から降りると荷物を運んで駄賃をもらおうとする人に囲まれると聞きますが、こちらは柵で取り囲まれていて四方八方から視線を感じ、まるで見世物小屋の舞台に放り込まれたような気分でした。バングラデシュでは外国人が少なく、格好も違うことからとても目立つので、街中を歩いていても常に視線を感じます。農村部で立ち止まり施設の説明を受けていると、あれよあれよと言う間に人が集まり囲まれてしまいます。囲まれると言ってもただただジッと見られるだけで質問責めにあう訳ではありませんが、バングラデシュに滞在している間はホテルの部屋以外はどこにいても視線を感

じ、慣れるまでは必要以上に身構えて余計な気苦労がたえませんでした。

調査以外には、JADE バングラデシュや NGO アジア砒素ネットワーク（以下 AAN）のプロジェクトサイトを訪問させていただき、水と衛生に関していろいろな話を聞くことができました。その中で特に印象に残ったのがプロジェクトに携わる方々皆が、「ただトイレを建設したり井戸やフィルターを設置するだけでは意味がなく、住民が必要としている技術が必要だ」と強調されていたことです。

JADE バングラデシュが導入しているエコサンを建設しても使い方を知らなければ意味がなく、またフィルターや井戸を掘ってもメンテナンスの仕方が分からない、水の味が悪い、では住民の方々は利用してくれません。エコサンを紹介するために、建設候補地の住民をすでにエコサンが利用されている地域に招待してエコサンを知ってもらったり、劇や音楽によって飲料水のヒ素汚染問題を紹介するなど、現地の実情を踏まえた上で活動していることに関心させられました。

自分自身の研究は、実際に資金を調達して代替技術の導入やトイレの建設を行うものではなく、バングラデシュの住民に受け入れてもらえる技術とは何か、そして、いつ、どこに、どうやって導入するかを考案することです。残りの修士の 1 年間でどれだけのことが出来るか分かりませんが、現地で活動されている方々の役に立てるよう、何よりも向こうの住民の方々のためにも、出来ることを精一杯やろうと思います。最後になりましたが、バングラデシュの訪問中はここで記載していない多くの方々にもお世話になりました。この場を借りて御礼を申し上げます。

研究フィールドの村の子供たち

バングラデシュ便り2号 (31/Jan./2008)

官僚社会とワイロ

本会運営委員　高橋 邦夫

バングラデシュに根を下ろした活動を行う場合、さまざまな手続きが必要となる。それも煩雑きわまる膨大な資料の提出を求められる。例えばこの国でボランティア活動を行う場合、NGOAB（NGO Affairs Bureau）の認定を受けなければならない。NGOAB 認定の条件として、それ以前に銀行口座を開設しなければならない。銀行口座を開くためには、ボランティア団体の定款（原本と英訳）、それを保証するための日本国政府の証明に類したもの、ボランティアの基金を提供するファンド（例えば JICA など）のサイン入り保証書、活動の概略と概算、日本国から送金する場合の計画、銀行の用意する名義書式への記入などである。当初、現地スタッフの話では、パスポートと顔写真数枚を用意し、しかるべき書式に記入すればよいとのことであったが、結果は上記した通りである。そして、口座開設には、書式を揃えて申請してから最低 1 ヶ月は要するのである。

次は、いよいよ NGOAB への申請となる。このため FD（Foreign Donor）なる所定の形式を整えなければならない。上記書類と重なる部分もあるが、活動内容と予算の概略を記入しなければならない。これら部厚い書類に加え登録料 1,500 ドルを添えての申請となる。通常申請から認定までは、早くて 3 ヶ月と言われているが、NGOAB は内閣府の直属機関であるため、政府の状態に依存する。例えば、政変や今回のサイクロン災害など政府機関が常ならぬ状況になった場合には、遅れるのが必然とのことである。

NGOAB への申請した後、じっと認定を待っていればよいかというと決してそうではなく、NGOAB のチェックが入ることになる。NGOAB の役人が、事務所に活動内容を確認しに来たり、我々の現地スタッフの家にまで内情視察に来るのである。勘のよい人はすぐに気がつくであろうが、要するに手を変え品を変えしてワイロを要求するのである。現地スタッフはこれは慣習であると説明したが、我々は断固拒否した。そして、幸運にも申請して 3 ヵ月後、認定の運びとなったわけである。

認定書を受け取りに NGOAB へ行ったが、現地スタッフは、何か土産に持って行って欲しいという。500Tk のケーキを携えて NGOAB へ行き、とある局長から認定書を押し頂いた次第である。木っ端役人のワイロ要求の事実を局長に話すと言うと、それは止めてくれと現地スタッフに止められた。

バングラデシュには、現在、正式な内閣は無い。選挙人が確定できないため、5 年に一度の総選挙ができないからである。臨時政府は、軍の力を背景にしているとはいえ、規制の効いた政策を展開しているようである。現に、前首相（ジア・カレダ）、前々首相（シュエク・ハシナ）は、財産隠匿（ワイロ）などの理由で監獄にいる状況にあり、政情は以前に比べ安定しているというのが多くの市民が認めているところである。

さて、NGOAB に話を戻そう。いったん NGOAB の認定

を受けると、日本からの支援活動のすべてを個別詳細に、改めて NGOAB に申請しなければならない。一般に、日本から資金を持ち込み、支出したものの領収書を得れば事が済むと考えられるが、この国で支払うべき費目の金額を、NGOAB がこの国の銀行を介して管理するという仕組みである。挙句の果てに、活動に携わる日本人メンバーの履歴書ともいうべき書類や、最終学校の卒業証明書までが求められるである。それも英語版である。書式を揃えるだけで最低 1 ヵ月はかかろうというううえに、この手続きには、申請してから最低 45 日を要するのである。

支援活動に関わる NGOAB の認証を受けたからといって活動が始められるとは限らない。今度は銀行が首を振らないのである。こう書いてくると、読者はいたちごっこの無限ループに入ったように当惑されるだろう。当事者はさらに困惑した次第である。冒頭に銀行口座を開くためには、ボランティア団体の定款（原本と英訳）、それを保証するための日本国政府の証明に類したものが必要と書いた。それはその時点では、例えば基金を提供する JICA のサイン入り保証書で良かったのである。それが、日本国政府の証明が無ければならない、に変わったというのである。バングラデシュ国立銀行の通達なのだそうである。困惑した我々は憤懣を抑えて、日本大使館のサインを貰い、銀行に持参した次第である。その後、問題は解決したかというと、もうひと踏ん張りの手続きを要求された。余りにも馬鹿馬鹿しいので記述を断念する。

上記した紆余曲折は、これまで明朗でなかった会計の仕組みを曝け出しているという好意的な見方もできるだろう。他方で、手続きやプロセスが煩雑になることは、それだけ官僚的無駄とワイロの横行を許すことに繋がっている現然とした事実を知っている。慣習となっているという申請時のワイロの要求から是正したほうが、まずは現実的ではないか。

গণপ্রজাতন্ত্রী বাংলাদেশ সরকার

এনজিও বিষয়ক ব্যুরো

প্রধানমন্ত্রীর কার্যালয়

১, পার্ক এভিনিউ, মৎস্য ভবন (১০ম তলা), রমনা, ঢাকা

স্বেচ্ছাসেবী সংস্থার নিবন্ধনের প্রত্যয়ন পত্র

অধ্যাদেশ নং ৪৬, ১৯৭৮

নিবন্ধন নম্বর ঃ ২২৬৮ তারিখ ঃ ৩৬/৪১/২০০৭ ইং ।

প্রত্যয়ন করা যাইতেছে যে, ১৯৭৮ সালের দি ফরেন ডোনেশনস (ভলান্টারী এক্টিভিটিস) রেগুলেশন অর্ডিন্যান্স এর বিধানমতে, অপর পৃষ্ঠায় বর্ণিত শর্তসাপেক্ষে

[illegible] কে

নিবন্ধীকরণ ~~এর নিবন্ধন নবায়ন~~ করা হইল।

আমার স্বাক্ষর ও সীল মোহরে ১৯ সেপ্টেম্বর, ২০০৭ ইং তারিখে এই প্রত্যয়ন পত্র জারী করা হইল।

মহাপরিচালক

NGOABが発行したJADEの認定証

旧事九官録　巻５

続々　物質三態の事

本会運営委員　森田英樹

トイレ関係の古書を収集していて、何とも困るのは、本のタイトルだけではその内容がトイレ関係のものであるのか、さにあらざるものなのか判別がつかない事である。古書店で現物を見られれば良いのだが、時間の自由もきかない身としては、購入の多くを目録販売に頼らざるを得ない。まさに、財布を睨みながらの『バクチ』である。以前も戦前に出版された『化粧室』という本を目録で見つけ、迷いに迷ったあげく注文した。案の定、トイレとは無関係の「女性が化粧をする為の部屋」に関するもので、とんだ散財をした。

高野六郎の『便所の進化』『屎・尿・屁』ならばトイレの臭いがプンプン漂っているが、『医者の黒焼』『銀座の鰯』となるとお手上げである。まあ、トイレの偉人高野六郎の代表作であるならば、立場上？持っていても良いかなと、注文した次第。

『医者の黒焼』『銀座の鰯』ともに随筆で、『医者の黒焼』は 40 編『銀座の鰯』は 48 編から構成されている。本のタイトルは収録されている 1 編の随筆を本のタイトルとして採用しているものだ。細菌学を専攻し、改良便所の研究を行った人物であるから、トイレや排泄物、病原菌についての随筆が多い。しかし、なにより『ごみの文化・屎尿の文化』において、地田修一氏が「文筆にも長けており」と評しているように、軽妙洒脱な文体で、読んでいて楽しい。この軽妙洒脱さは、『医者の黒焼』『銀座の鰯』の両タイトルにも良く現れている。『医者の黒焼』を要約すると、様々な黒焼き【薬用として、動植物を蒸し焼きにしたもの。イモリの黒焼きは有名。森田注】の中で、最近、蝿の黒焼きの出願があった。蝿は全ての伝染病菌を運搬するが、自らは感染しない。この、不思議な抵抗力を備えた蝿の黒焼きを服用すれば、万病に効くに違いない。という理由での出願であった。そこで高野は、この論で行けば、一番有効なのは医者の黒焼きかもしれない、と結んでいる。医学博士としての著者の経歴を知るなら、まるで落語のオチのようである。

『銀座の鰯』の要約としては、落語の「目黒の秋刀魚」に掛けているわけであるが、銀座西 7 丁目に「鰯屋」という店が開店した。前菜からおしまいまで、徹頭徹尾、鰯を食材として料理を出す店である。鰯は秋刀魚と違って漁獲の時期が限定されず、安価で栄養価も高い。日本人に鰯食に関心を持たせる事は、時局からも大変結構なことである。と結んでいる。

『銀座の鰯』は昭和 19 年 6 月出版。この月、アメリカ軍はサイパン島に上陸。翌 7 月、日本軍守備隊は玉砕している。

2008年多摩川源流まつりのご案内

風薫る５月、今年もその４日に、恒例の多摩川源流まつりが奥多摩の山梨県小菅村主催により行われますが、日本下水文化研究会では、下記の要領で参加いたします。

翌日５日は、私たち都民の水道水源である笠取山の水干（みずひ）まで、宿でいただいたおにぎりをもって、軽いハイキング（有志のみ、片道２時間、雨天中止）を予定しています。老いも若きも、女も男もふるってご参加ください。ハイキングはスニーカーで十分です。

見所；長作観音＜小菅村に入る山道の峠＞、白糸の滝、雄滝、郷土太鼓、お松焚き、打ち上げ花火＜漆黒の闇に映え、美の極致＞、小菅の湯、おいらん淵、水干＜源流の一滴＞

味；山菜、刺身コンニャク、山女、手打ちそば

記

日時　平成 20 年 5 月 4 日～ 5 日（1 泊 2 日）
集合　JR 八王子駅北口タクシー乗場、4 日午前 10 時
解散　同所、5 日午後 6 時（予定）
宿　　小菅村　山水館（やまみずかん）
TEL 0428-87-0533
費用　男性　9,000 円、女性 8,000 円、子供 5,000 円
（1 泊 3 食、交通費、飲み物とも）

※お問い合わせ、申込みは　藤森正法まで（自宅 TEL & FAX：03-3801-4848、携帯 090-4132-5501、携帯メール fujimoriseihou@docomo. ne. jp）、4 月 20 日締切
※ご要望などもお申し付けください。

平成 20 年度　屎尿・下水研究会例会の予定

次年度の屎尿・下水研究会例会の予定をお知らせします。時間はいずれも 18 時 30 分～ 20 時 30 分、会場は TOTO スーパースペース（新宿エルタワー 26 階）、プレゼンテーションルーム（JR 新宿駅西口より徒歩５分、電話： 03-3345-1010）です。

6 月 13 日（金）：竹島正氏（日水コン、元東京都下水道局）
「消えゆく下水処理設備を映像に残す」
ビデオの放映とその解説

7 月 11 日（金）：田中修司氏（日本下水道管路管理業協会、元国土交通省）
「下水道管路の災害時対策・復旧」（仮題）

9 月 25 日（木）：小峰園子氏（葛飾区郷土と天文の博物館）
「生活改善運動とトイレ・上下水道」

12 月 4 日（木）：関野　勉氏（本会会員）
「私の見たユニークなトイレマーク」

翌 3 月（詳細未定）：地田修一氏（本会会員）
「航空写真にみる下水処理場用地」

運営委員会・事務局より

- 本会報とともに、平成 19 年度の活動内容を収録した機関誌「**下水文化研究 19**」を同封いたしました。最近の講演ではスライドとして写真や図版が多く、それらの著作権の関係から、講演内容を的確に伝えられる講演録の作成が難しくなってきていますが、できるだけ内容を再現するように努めています。
- ふくりゅう 54 号でお知らせした 3 月 25 日の定例研究会（講師白幡利夫氏）は「第 42 回定例研究会」です。訂正してお詫び申し上げます。

ふくりゅう 通巻55号　目次

第12回総会案内	1
2008年度バルトン記念墓参と講演会案内	1
第41回定例研究会報告「トイレの秘密」刊行のいろいろ	2
風の国バングラ　トイレづくりの現場から	2
バングラデシュで水と衛生について見聞きして	3
バングラデシュ便り　官僚社会とワイロ	4
旧事九官録巻５　続々物質三態の事	5

編集後記　本年度のふくりゅうは 4 回の発行になってしまいました。2001 年度以降 5 回発行を続けてきたなか、隔月刊を目指そうとしていただけに残念です。今年度は海外プロジェクトが 3 件実施されるという状況はありましたが、その分記事にする題材は豊富にあったともいえますので、やはり編集体制を考え直さないといけないところだと思います。▶その海外活動では、訪問を重ねるたびに学ばなければいけないことに気付きます。よく「自立的」などと言って、いずれは援助に頼らないことを求めたりします。しかし、我々日本人はどうでしょうか。自立しているとしたとしても、それは決して一人でやれるということではなく、たくさんの他者との関係が築かれていたおかげで、ものごとを自立的に決めたり行動しやすいという状況があってのことと思います。開発途上国では、この他者との関係が決定的に不足しています。「自立」を求めることは、ほんとうに息のながいことだと思います。▶この 18 日までバングラデシュへ行ってきましたが、昨年の研究発表会にも参加された上小澤初馬ささん（17 歳）が同行しました。こちら側が衛生に困っていると考えている人々に、トイレの普及を図るには、人々の「気付き（awareness）」が大切なことに気付いたようです。本会活動に若い人の参加が少ないという指摘をしていた彼ですが、いずれ若い人のネットワークを作ることも考えているようなので、その際にはこちらも若い人のネットワークと情報を共有し合うことを約束しました。▶ NPO 法人は会員へ情報やサービスを提供するだけの組織ではありません。少なくとも、会員相互の情報交換は欠かせません。その情報交換ができる場として、会報がより機能するように努めていきたいと思います。（酒井 彰）

特定非営利活動法人　日本下水文化研究会
〒162-0067　新宿区富久町6-5　NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください
http://www.jca.apc.org/jade/index.htm
関西支部　http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsuhi/